風鈴

御中 1A

地震観測史上初

被害総額4.6兆円と甚大

今年四月、熊本地方を襲った最大震度七の二度の巨大地震・近代の地震観測史上初めてのケース・最初の地震で大丈夫だった家が二度目の地震で倒壊するなど甚大な被害となった・私たちは被災地の現状をそこに住む祖父母の方との手紙やファックスで取材した。

テーブルの下で恐怖を

今年四月十四日午後九時二十六分熊本地方を震源とする地震が発生した・県民のシンボル熊本城が僅かな石垣で持ちこたえている姿がテレビに映る度に、地震の凄さを知った。私たちは熊本県に住む祖父母の級友と協力し、ファックスで被害状況や復旧を取材した。

震度三以上の地震回数が四百回、内閣府の被害総額が4.6兆円と甚大でしだが、震源から離れると棚のものが落ちる程度でテーブルの下で揺れが収まるのを待ったなど、震源からの距離によって被害に差があった。

被災直後には全国から多数のボランティアの方によってライフライン工事や食糧配布、医療活動等をしていただいた。すらに、全国から寄せられた応援の声で勇気づけられたという。

今取材から災害時の絶点施設が頑丈なこと、便利さや物を優先はず人間も自然の一部と心がけ、人同士の思いやりの大切さを教えていただいた。

がんばれ！熊本城

今回の地震で崩れた熊本城・城内には国指定重要文化財が十三か所、その修復に六百億円と二十年がかかるかも知れないそうだ。さらに壊れた公共施設やショッピングセンターの復旧や災害住宅の建設等に取り組みを進めている。また、地震によって発生した瓦礫置場に山となった瓦礫の処理全国から寄せられた支援金の使い道や優先順位など、多くの課題はこれからだそうだ。

住民が元の生活に戻るための復旧は急ぐことであるが、地震に強い建物や環境整備等に対して、堅実に時間と物を大切に使っていくことになるだろうと思う。

ミニ新聞発行

上のような被害を受けた人に対して、遠く離れた地域の住む私たち中学生にできることは何かを考えてみた。

今回に取材した熊本に祖父母がいる級友は、妹と「ミニ新聞」を発行した。内容は被害に遭った時に役立つ防災グッズの作り方や祖父母を笑顔にする記事などを工夫した。

地元であるならば、避難所での食事の配ぜんや物資の運搬に参加することも可能だが、今回は難しい。また、色々な場所で復興のための募金が行われている。

私たちにできることは、苦しんでいる被災地の人を笑顔にしたり、募金に協力したりするなど、出来ることに心を込めて行いたいと思った。

賢い使用者に

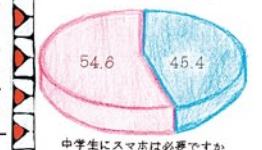
我が家で「中学生にスマホを持たせるべき」ということが話題になった。ことの発端は「スマホを買って」と親にお願いしたからだ。内閣府の「平成二五年度青少年のインターネット利用環境実態調査」によると、中学生のスマホの利用率は四七パーセントと私の予想を上回り、その数値はかなりの勢いで増えているそうだ。

そこで御影中の一年生のスマホ所有状況をアンケート調査した。まず、「中学生にスマホは必要ですか」の問いでは、五四パーセントが必要ないと回答。また、「スマホを持っていますか」では三十パーセントの生徒が持っていると答え、内閣府調査の中学生の数値よりは低いが、小学生の十三パーセントより高い。中学校での三年間で所有率が増えていくと思った。

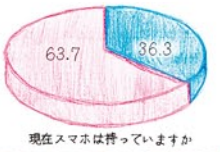
一方、持たせる側の親の気になる点として、雑誌に「勉強や睡眠の時間が少なくなる」など、「時間の浪費」が最も多く、「スマホの依存」を心配することも多かった。この「依存」に関わって厚生労働省の二〇一三年八月に発表した調査によると、全国の中高校生のうち推計五一万八千人（約八%）が「インターネット依存」だそうだ。このことは、スマホが従来の携帯電話とは異なり、ゲームや動画の閲覧ができることから自然に利用時間が長くなってしまう傾向からだ。しかし、教科の調べ学習に使う、音楽を聴く、写真が容易に見られるなどスマホならではの長所も多い。

このような中、七月、学校の「スマホ・ケイタイ安全教室」で、他人への悪口の書き込みからのトラブル、ゲームやショッピングで多額の請求、プライバシーの流失、「ながら操作」での自転車の交通事故など心配や危険なことについて学習した。

中学生は部活動に行事にと忙しい。便利なツールの依存などの短所には自制心を発揮し、賢い使い者となるよう上手な使い方を身に付けたい。



中学生にスマホは必要ですか



現在スマホは持っていますか

二世紀への第一歩

～開校百年を地域と共に～

「ありがとう一〇〇年～未来へつなげ　笑顔と元気を！～」の大きな看板が公民館横に掲げられ、通行く人から「おめでとう」の言葉がかけられる。この言葉は、私たちの母校御影小学校が今年開校百周年を記念し、児童から募集したキーワードを基に先生が考えた開校百周年のテーマ。

私たちは百回目の卒業生。いつもこの言葉に誇りを感じながら中学校に登校している。百年を応援したい気持ちから壁新聞に取り上げることを決意、近藤弘子校長先生に取材をお願いした。

まず御影小学校の百年の歴史では、大正五年五月一日上野室母常小学校佐念頃将別教習所とし、地域の子供たちにしっかり教育をしようという親の考えから開校し、今年開校百周年を迎える。この間、尋常高等小学校、国民学校と名称変更や町村合併を経ながら、昭和三十一年に現在の名称になった。また、昭和五十一年に上羽芥小学校に続き羽芥小学校や旭山小学校が御影小に統合された。

次に御影小学校への地域の期待では校章に注目した。校章の上下に雄大な「剣山」を、十勝川を三本の曲線で表現するなど、豊穣の大地と豊かな自然環境を六陵の形で八咫鏡（やたのかがみ）、剣岳は草薙の剣（くさなぎのつるぎ）など三種の神器を意識するという地域の強い願いが込められ今も多くの方々から愛されている。

また、御影地区ではアイスホッケーが盛んだ。昭和七年に赴任した加藤光也先生が授業でスケートを取り入れ、地域の方と一緒にリンクづくりをしたのがきっかけだ。

校庭の大きな柏の木は私たちの誇り。風雪に耐え、何時も温かく見守ってくれている。御影小が二世紀に向け、柏の木のように「あいさつ・ありがとう・あとかたづけ」の伝統や歴史をさらに堂々と輝かせてほしい。

日本人の誇りない心

リオオリンピックが終わった。日本選手の大舞台に弱い、外国選手に圧倒されなかなか力が発揮できないという印象が変わった。史上最多のメダル獲得、特に金メダルはミュンヘン大会に次ぐ十二個、まさに日本選手の活躍にたくさん感動した三十一回となる今大会は、南アメリカ大陸やポルトガル語圏での初めての大会、また、開催地の気候が冬の時期に開催されるのも初めてだ。

このリオオリンピックには、二百五の国と地域から一万五百人の選手が参加、日本からは三百三十八人の選手が参加した日本選手の活躍では、柔道の大野将平選手や田本知道選手の外国選手にひるまず立ち向かう姿勢、特に金メダルの中村航平選手の大舞台でも力を発揮する姿などを目にした四年後の東京オリンピックパラリンピックでの日本選手への期待が大きくなった。

私たちは今オリンピックでの日本選手の活躍が別世界のことと思いがちだが、選手が見せてくれた「ひるまない、諦めない心」は、これからの中学校生活や将来にとっても大切なことだろう。

新感覚で人気上昇

清水町の地元産食材をふんだんに使ったご当地B1グルメ「十勝清水牛玉ステーキ丼」。愛称は「牛玉丼」という。毎年開催されている「新・ご当地グルメグランプリin北海道」で三連覇している。そこでその理由を探ってみた。

この牛玉丼の誕生は二〇一〇年だ。町内で生産される農産物の活用やPRなどの視点から、「食を通じて清水町の未来を考えよう」と、十勝清水町農業協同組合と町民有志等が集い、新ご当地グルメ開発に取り組み生まれた。牛玉丼で使用している牛肉は、清水町が国内で牛肉として評価が低かった。ホルスタイン種の価値を高めたブランド名「十勝若牛」。生産量が全道2位の牛肉をサイコロ状にカットしふんだんに盛り付け、生産量全道3位のみわわ鶏卵を惜しげも使った牛肉と卵のコラボさらに味噌で味付けした組み合わせは絶妙で「新感覚の牛丼」と人気を高めている。

町ではさらに人気を高めようと、北海道芸術高等学校と協力し、キャラクターやテーマソングをつくった。「ぎゅ～っとタマラン　おいしさ～」を合言葉に、町全体でPRなどに取り組んでいる。

ぜひ一度、清水町に来て「牛玉丼」を味わっていただきたい。

編集後記

私たち一年生は初めて壁新聞作りに挑戦した。この「風鈴」では、地元御影の紹介と今年特に心に残った熊本地震やリオ五輪の取材や調査をした。

〈新作スタッフ〉
宮脇　優子　箕浦　義輝
大石　夏穂　西垣　波音
中林寿泉奈　江本　湧